

自己認めるケア必要

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から
(5)

④

「毎晩寝ているところをたたき叩かれ、ボロボロに殴られた」。本島中部の20歳の男性は少年時代からの父親の虐待、家庭内暴力(DV)を振り返る。祖母、父親と3人で暮らしていたが、男性が中学生の時、祖母の死去をきっかけに、アルコール依存症と統合失調症の父の暴力が徐々にエスカレートした。「常に気が張った状態。怖くて家に帰らなくなって、友達のところを泊まり歩いていた」。

男性は高校に通学したが、家計は収入がほとんどなく、生活のため1年の途中で中退した。地元のスパーで働いたが、バイト代が入ると、親にすべて巻き上げられる生活だったという。17歳の冬、耐えきれなくな

「虐待された子自分を責める」

て家出した。「とにかく家から離れたかった」。自転車で那覇方面に向かい、公費で宿泊するなどしたが、所持金はほとんどなかった。やがて盗盗で捕まり、保護観察処分を受けた。「自分は駄目な人間。将来、自分も父親と同じような大人になるのではないか。そんな思いに苦しんだ。更生したいと願った。そんな時、依存症者の家族をケアする施設を知った」。



父親の虐待を忘れ、施設に入った男性。「家には帰りたくない」と言う

原因で貧困に陥っていく例も多く、DVも虐待は組み合っている。依存症からの借金も振り返り、そのしわ寄せが子どもの貧困につながっている」と話す。家族を支援する重要性を強調する。「虐待を受けて育った子は自分が悪かったかと思いがちな傾向にある。自分自身を好きになり、認めていくためのケアが必要だ」と語る。

男性はセレニティパークジャパン沖縄の施設を利用し、社会復帰に向けた準備を進めている。対人の恐怖があったが、多様な背景を抱える仲間と過ごす中で「だんだん人としゃべれるようになってきた」と話す。それでも夜中にうなされたり、人の気配に過敏だったりする状態からは抜けきれないという。

20歳の誕生日を迎え、今後どうやって生きていくかを強く意識するようになった。「父親には二度と会いたくない。絶対に、あんな人間にはならない。また心の傷は癒えない」。

「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄